「置き土産」

―初稿―

2023/6/29

雨森 れに

〈人物表〉

太田　マキ　（４２）　お酒が好きな女性。明るい茶髪のボブ。
ホスト　（２５）　ＢＴＳのジヨン似のホスト。金髪で短髪。
店主　マキのいきつけのＢａｒの店主

〈ログライン〉

朝帰りのマキがホストを家に招き入れ、ホストに怪異を置いていかれる

〈ねらい〉

怪異の始まり、怪異の謎を感じさせる

1.

Ｂａｒ・店内（朝）

小さな個人Ｂａｒ。カウンターで太田マキ（４２）が突っ伏して寝ている。

店主　「マキちゃん、そろそろ始発出てるよ」

顔をあげるマキ。

マキ　「……んん（眠そうに）あー、寝ちゃってごめん」

店主　「いーよ、いーよ。今日は５千円ね」

マキは鞄から財布を出し、５千円札を渡す。

店主　「ちょうどだね。ありがとー」

店主、笑顔で受け取り、レジにしまう。

マキ、スマホを取り出す。ロック画面に時刻とＢＴＳのジミン。

マキ　「もう５時過ぎてんだね。寝かせてくれてありがと。また来るね」

店主　「はいよ。またねー」

マキ、店を出る。

2.

ロータリー（朝）

繁華街と駅の間にある小さいロータリー。

マキは駅に向かって足早に歩いている。

金髪のホスト（２５）が後ろからマキの肩を叩く。

ホスト「おねーさん、ちょっといいですか」

マキ　「ひゃっ」

マキ、驚き、後ろを睨む。

ホスト「突然すみません。あの、家に連れて行ってくれませんか？」

マキ　「は？」

ホスト「今日、泊まるところがなくて」

マキ　「えっと、それは、これから枕して、あとから店に来てもらおうってこと？」

ホスト「営業じゃないんです。マジで困ってて」

マキ　「それ建前でしょ」

ホスト「違いますって。あ、じゃあ。僕の名前も店も教えないし、連絡先も交換しません。だから、お願い

します」
　ホスト、マキに向かって手を合わせて拝む。
マキ　「えー……そこまでかぁ」
　ホスト、拝んだ状態のまま大きく頷く。
マキ　「普段家に人入れないんだけど……しょうがないなぁ」
ホスト「ホントですか！　ありがとうございます！」
マキ　「お礼はＢＴＳのジミンに言って。ね、似てるって言われない？」
ホスト「あ、ジミン推しですか？　よく言われるんですよ」
　ホスト、笑う。

3.　部屋（朝）

　１ＤＫの部屋。
　缶チューハイの入ったレジ袋を提げたマキとホストが入ってくる。
マキ　「お腹すいたら冷蔵庫の中のもの、好きにしていいから。あっちが台所、こっちがトイレで、隣がお風呂」
　ホスト、部屋を見渡してから足元を見る。
ホスト「部屋、めっちゃ綺麗ですね。僕んちなんてあっちこっちホコリ落ちてるのに」
マキ　「私、毎日掃除しないと無理な人間なんだよね。ほら、こっち座って」
　マキ、ベッド前のテーブルに缶を並べ始める。
マキ　「迎え酒付き合わせてごめんね。飲んだ～！って感じしないと飲み直したくなっちゃって」
　缶が１０本以上並ぶ。
ホスト「これ全部、今飲む分なんですね？　いいですよ。付き合います」
マキ　「さすがホスト。じゃ、乾杯しますか」
　マキとホスト、缶を開け笑顔で乾杯する。
×　×　×

テーブルの上で散乱する空き缶。
ホストはマキに肩を貸し、髪を撫でている。
マキは目を閉じて身を任せている。
ホスト「マキさん、髪、いい色ですよね」
マキ「ボブだと色ぐらいでしか遊べないからね。あー、眠くなってきちゃった……」
マキ、眠そうにしながら、テーブルの上の缶を指差す。
マキ「あとでゆすぐから、流しに置いといて」
ホスト「へー、ちゃんと洗うんですね。えらい」
ホスト、缶を集めて台所に向かう。
マキはその背中を眺める。
マキ「あのさぁ。なんで帰れなかったの」
ホスト「え？」
マキ「泊まるとこないっていうからホテル暮らしかと思ったけど、自分ちの話したじゃん。家に帰れないんでしょ」
ホスト、無言。
マキ「ホストが帰れないんてさ。寮でなんかあったか、女とトラブルになったかってとこじゃん」
ホスト「それは」
マキ「彼女と、喧嘩した？」
マキ、ホスト、見つめ合う。
ホスト「……まぁ。そんなとこです。彼女、置いていきたくて」
マキ「やっぱ女かぁ」
マキ、ベッドに入り、背を向ける。
後を追うようにホストもベッドに入る。
ホスト「怒ってます？」
マキ「眠いだけ。鍵、靴箱の上にあるから。出るときに玄関のポストから投げ入れといて」
ホスト「絶対怒ってますよね」
マキ「うるさいな」
ホスト、マキを抱き寄せながら、

ホスト「僕がマキさんをどんなに好きか心の中を見せてあげたい、本当に」
マキ、吹き出して笑い、顔をホストへ向ける。
マキ「その顔でジミンのセリフ言うのはずるいんだって」
ホスト、マキに口づける。そのままマキに覆いかぶさる。
マキ、ホストの首に手を回す。

4.

浴室・外（朝）

シャワーの水音。
戸のすりガラス越しにホストがシャワーを浴びているのが見える。

5.

部屋（朝）

マキ、寝ている。
ベッド横に女の青白い脚。

6.

部屋（夕）

目覚まし時計が16時を示し、アラームが鳴る。
マキ、体を起こして部屋を見渡す。
テーブルの上にメモを見つける。
『置いてくれてありがとう』と書いてある。
慌てて立ち上がり、玄関に向かう。

7.

玄関（夕）

マキの靴だけが脱ぎ捨てられている。
マキ、落ちている鍵を見つけ、靴箱の上に置く。
大きくため息をつき、浴室へ向かう。

8.

浴室・内（夕）

立って髪を洗うマキ。
外側、すりガラス越しに黒く長い髪の女の影。
マキ、髪をゆすいでから、排水溝の蓋に指をかける。

中には大量の黒く長い髪の毛。

マキ　「（排水溝から離れて）えっ？　なにこれ！？」

マキ、自分の髪を掴んで排水溝の髪と見比べる。

浴室床には黒く長い髪の毛がちらばっている。

鏡に視線を移す。

鏡に映るマキの体にも数本、黒い髪の毛がついている。

取ろうとすると、上から数本、髪が落ちてくる。

マキ、ゆっくり上を見る。

天井に束になった黒い髪がいくつもへばりついている。

マキ、濡れたまま浴室から逃げ出す。

9.　部屋（夕）

マキの荒い息遣いの音。

マキはタオルを体に巻き付けて床に座り込んでいる。

浴室、台所、部屋中に視線を泳がせる。

テーブルの上のメモが目に留まる。

マキ　「置いてくれてありがとう……」

マキ、目を開く。

マキ　「『彼女、置いていきたくて』……」

天井から床に黒い髪が束で落ちる。

マキ、口元を手で覆う。

ゆっくりと上を向く。

つづく